

鷲と鷹の話

VOL. 96



オ オ ワ シ

留萌いま・むかし

冬の良く晴れた日、大空をながめてみよう。

カラスやトビの群れに混じって、ひときわ大きな鳥が空を舞っている姿を見かける。翼を拡げた姿はゆうに二メートルを越える。尾羽は純白に輝き、その目は鳥の王者らしく鋭い眼光を放っている。また、肩と尾羽が真っ白でくちばしの黄色があざやかなものもいる。

これらは日本で最大の鷲、オジロワシとオオワシである。留萌でもこんな鳥が見れるのかなどと思われる人も多いであろう。実はこれからの季節がこれらの鷲たちに会える季節なのである。

オジロワシとオオワシは現在ではほとんど冬鳥として北海道にやってくる。一部北海道の道東方面で、巣を作り子育てをしているものもあるがその数はいたって少ない。ほとんどがカムチャッカ、千島列島、シベリア、サハリン（樺太）で営巣し冬鳥として越冬のために北海道以南にやってくるのである。

しかし、昔は違っていた。江戸時代には当時の蝦夷地の代表的産物として、鷲鷹の尾羽と鷹があげられている。また、鷹待（たかまち）という鷲鷹を捕まえる職業まであった。鷲鷹の尾

羽は当時の弓の矢にはなくてはならないものであった。つまり矢の方向を定める矢羽は、鷲鷹の尾羽が最高であり、その中でも蝦夷地のものが最上のものでして取扱われたのである。

また、江戸時代に入ると今まで公家の遊びとしてきた鷹狩が幕府の奨励もあって大名の間に浸透し、大名たちは競って鷹を求めた。この結果良鷹の産地として蝦夷地が注目を浴び、多くの鷹匠が蝦夷地に入り込み、良い鷹を捕獲しようとして試みた。松前藩も藩の財政を支えるものとして奨励した。寛文年間（十七世紀後半）には蝦夷地の鷹打ち場は三百ヶ所以上に上り、松前藩の鷹の売上は千から二千両に達したといわれる。松前藩でも毎年幕府に鷹を献上し、そのため幕府から江戸までの鷹献上の道中の特権を与えられていたほどである。

留萌にも当時多くの鷲鷹が生息していたこと予想される。松浦武四郎の西蝦夷日誌のオビラシベ川の説明に

熊、豺犬、鷲鷹、鷲多しと記している。

留萌の鷲も当時の江戸の空を飛んだのかもしれない。冬の日鷲鷹捜しをするのも一興である。

福士広志

館長とふるさとの海芸系

ふくし・ひろし
昭和28年生まれ。41才。
同58年留萌市役所入庁。
同60年より本稿執筆